

# 編 修 趣 意 書

(教育基本法との対照表)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
28-67	高等学校	公民科	倫 理	
※発行者の 番号・略号	※教科書の 記号・番号	※教 科 書 名		
35 清水	倫 理 313	高等学校 現代倫理 新訂版		

## 1 編修の基本方針

本書は、高等学校学習指導要領（第1章「総則」、第2章第3節「公民」第2「倫理」）の趣旨にもとづき、教育基本法や学校教育法等の規定をふまえ、社会における「公民」として必要な倫理観や教養を涵養することを目標に、高等学校公民科「倫理」教科書として編修したものである。編修に際しては、「公民科」「地理歴史科」各科目の学習内容との関連についても考慮している。

▶本書は、教育基本法第2条に示された教育の目標を達成するため、以下の基本方針に基づき編修している。

### ① 教育基本法第2条第1号に関して

▶全編を通し、「公民」として生きていくうえで糧となる知識・教養が身につくよう配慮して記述した。真理を追究してきた先人たちの軌跡を辿ることで、真理を求めるとはどのようなことかを考察できるよう、意を用いている。

### ② 同第2号に関して

▶青年期の学習において、自己の生き方と労働とのかかわりについて考察するとともに、また創造性を発揮して活動することの大切さを記述している。

### ③ 同第3号に関して

▶青年期の学習において、自己の形成においては他者との関係が重要であることを記述している。また、日本や西洋における女性解放の歴史、家庭や職場における男女共同参画について触れるとともに、全編を通して個人と社会の関係やよりよい社会のあり方について考察している。

### ④ 同第4号に関して

▶生命と倫理の問題について、深く思考し行動した先人を挙げている。また、生命科学や地球環境の問

題を、現代の重要な課題としてとりあげている。

## ⑤ 同第5号に関して

- ▶日本の風土や文化をとりあげるなかで、伝統や文化が育まれてきた過程について触れている。  
また、異なる文化や宗教・習慣をどのように受けとめて対応していくか、平和構築のためにどのようなことが必要かを考えさせる課題を随所に設けている。

## 2 対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
プロローグ	本書の導入として「人間とは何か、生きるとはどういうことだろうか」という問いを掲げ、その問いに対する答えを見出していく過程を通して、真理を求める態度を養おうとしている（第1号）。	4～6ページ
第1編	現代に生きる自己の課題	
	青年の生き方と日本の社会の記述を通して、青年の自己実現と労働とのかかわりについて考察し、職業と生活との関連を重視するとともに、勤労を重んずる態度を培うよう配慮している（第2号）。	16～19ページ
	他者とのさまざまな「関係性」に着目する記述を通して、地域や社会とかかわりながら、そのつながりの中で社会の発展に寄与する態度を養うよう意図している（第3号）。	12～13ページ 18～19ページ
第2編	人間の生き方と社会のあり方	
第1章	第1節 命をかけて知恵を愛し続けたソクラテスをはじめとする先人たちの思索と生涯の記述を通して、幅広い知識と教養を身につけ、真理を求める態度を養うように配慮している（第1号）。	第1節全体 26ページ
	第2節 ユダヤ教・キリスト教・イスラームについての記述を通して、一神教についての知識を身につけ、理解を深めるとともに、福音書に記されているイエスの言動などから、民族の差異をこえる普遍的な人間愛について思いを至らせることができるよう意を用いている（第1号）。	第2節全体 38～40ページ
	第3節 人生における苦悩や死と向き合い、欲望から心身を解き放ち魂の平安を求めた仏陀の教えと生涯の記述を通し、心を惑わせることなく真理を求めることの重要性について理解を深めるよう配慮している（第1号）。	第3節全体 52～55ページ

図書の構成・内容		特に意を用いた点や特色	該当箇所
第1章	第4節	社会秩序を構築し人々を幸福に生活させるために指導者はどうあるべきか、人の生き方とは本来どうあるべきか、論争の中で深められた儒家や道家の思想を通して、社会の構成員としての自己の意識を喚起するとともに、社会の発展に寄与する態度を養うように配慮している（第3号）。	第4節全体 58～59ページ
	第1節	日本の自然と風土をとりあげる中で、古代日本人の自然観や宗教観、倫理観について触れ、日本において伝統と文化がいかに形成されてきたか、理解を深めるように配慮している（第5号）。	71～74ページ
第2章	第2節	インドで誕生し中国で展開された仏教思想が、日本において独自の仏教として発展していく過程を記述し、広く知識と教養を身につけるとともに、外来の思想を受容しつつ独自の思想・文化を形成していく日本の風土についても思いを巡らせることができるよう意を用いている（第1号・第5号）。	第2節全体 85～86ページ
	第3節	徳川幕府の支配体制のもと、為政者としての武士の道徳となった朱子学、中国の古典を重視した古学、日本的な心性や道徳を主張した国学、町人のあるべき道徳を説いた石門心学などの記述を通し、近世において展開された徳についての理解を深め、広く知識・教養を身につけることができるよう配慮している（第1号）。	第3節全体 87～94ページ
	第4節	江戸末期から明治にかけて、西洋文化を受け容れ近代国家としての日本の基礎を築くため力を尽くした人々とその思想について記述し、広く知識と教養を身につけることができるよう意を用いている（第1号）。	第4節全体
	第5節	明治以降、西洋的価値観と伝統的価値観のあいだで模索した人々や、社会問題の解決を求めた人々について記述し、近代日本の形成の過程で展開された様々な思想について理解を深めることができるよう配慮している（第1号）。	第5節全体
	第6節	戦争の時代とその後の日本の記述において、個人の尊厳や民主主義における個の主体性を問い返そうとする思想を通して、正義と責任を自覚し、主体的に社会の形成に参画してその発展に寄与する態度を養うよう配慮している（第3号）。	113ページ
第3章	第1節	ヨーロッパにおけるルネサンス・宗教改革・モラリストの記述において、それまで神の創造した世界の中でその秩序のもとに生きていた人間が、自由な活動によって個性を表現し、自らの意思や考え方で世界に向かおうとする姿を通して、人間のもつ創造性に目を向けさせ、自主及び自立の精神を自覚するように配慮している（第2号）。	114～116ページ 118～119ページ

図書の構成・内容		特に意を用いた点や特色	該当箇所
第3章	第2節	近代科学の成立と方法についての記述を通して、科学技術の発達をもたらした科学的な思考や近代的な知のあり方についての理解を深めさせるとともに、科学技術の発達によって新たな倫理的課題が生じていることにも触れ、近代的な知について再考を促すなど、生命や自然の大切さに思いを至らせるよう配慮している（第1号・第4号）。	第2節全体 127～128ページ
	第3節	自由な個人としての人間が自ら行う契約によって国家と社会を根拠づけるという社会契約説の記述を通して、人権思想の形成について理解を深めるとともに、自らもまた社会を形成する個人であると意識させ、主体的に社会の発展に寄与する態度を養おうとしている（第3号）。	第3節全体 129～133ページ
	第4節	科学の発展が技術革新と結びつき、資本主義的経済が拡大していく近代ヨーロッパ社会において、人間の認識能力や道徳の問題、精神のはたらき、人間性の回復、社会とのかかわりなどについて思索を重ねた人々の記述を通して、真理を求める態度を培い、広い知識と教養を身につけることができるよう配慮している（第1号）。	第4節全体 137～139ページ
	第5節	歴史とともに哲学の中心的テーマも変化していく中で、言語・欲望・権力というテーマを軸として現代の思想をとりあげる一方、複数の他者との間の公共性、女性の解放、富の再分配による公正の実現などについて思索を重ねた思想家も紹介し、公共の精神に基づいて、社会における正義と責任、男女の平等、自他の尊重を重んずる態度を培うよう意を用いている（第3号）。	第5節全体 161～166ページ
<b>第3編</b>		<b>現代の諸課題と倫理</b>	
課題学習1	「科学は生命にどこまでかわるか」というテーマのもとで、バイオの時代と生命倫理、人体の資源化・商品化、再生医療の可能性と課題などについて記述し、生命倫理が現代の重要な課題であることを理解するとともに、生命を尊ぶ態度を養うよう配慮している（第4号）。	172～177ページ	
課題学習2	「地球の環境の危機と人間の生活」というテーマのもと、かけがえない地球生態系や環境危機に対する取り組み、環境の保全と再生などについて取り上げ、自然を大切にして環境の保全に寄与する態度を養うよう意を用いている（第4号）。	178～183ページ	
課題学習3	「情報・メディアといかにつきあうか」というテーマのもと、マスメディアをめぐる問題やインターネットをめぐる問題についての考察を通し、よりよい社会の形成に主体的に参画していく姿勢を培おうとしている（第3号）。	184～187ページ	

図書 構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
課題学習 4	「経済はどうあるべきか」というテーマに即して、企業の社会的責任と市民の動き、望ましい経済のあり方などを取り上げ、経済活動と倫理について考察する中で、正義と責任を重んじ、社会の発展に主体的に寄与する態度を養うよう配慮している（第3号）。	188～191 ページ
課題学習 5	「家族と地域社会における人々の結びつき」というテーマのもと、現代の家族や地域社会が抱える問題についての考察を通して、男女がたがいに尊重し合い、主体的によりよい社会を形成しようとする意識を喚起するように配慮している（第3号）。	192～195 ページ
課題学習 6	「異なる文化とともに生きるには」というテーマに即し、現代社会における文明の衝突、自民族中心主義と文化相対主義などの記述を通して、異なる文化をもつ人々との共生が不可欠であることへの理解を深めるとともに、他国を尊重し国際社会の平和と発展に寄与する態度を養おうとしている（第5号）。	196～199 ページ
課題学習 7	「世界の平和と幸福の実現をめざして」というテーマのもと、人類の福祉の向上のために何ができるか、考察していく中で、国際社会の平和と発展に寄与する態度を培おうとしている（第5号）	200～203 ページ

### 3 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

- ▶ 記述するにあたっては、内容の充実をはかりつつ、高校生の発達段階を鑑み、簡潔・平易であるよう配慮した。
- ▶ 本文の理解を促す写真・図版・原典からの資料などを、必要に応じ各所に配した。
- ▶ 前見返し・後見返しには年表を置き、思想家や思想を歴史の流れとともに把握できるよう配慮した。
- ▶ 随所に特集ページ（Close up）を設け、学習への興味を喚起するとともに、学習を深めてゆくよう配慮している。



## ④ 現代の諸課題を倫理的観点からとらえる

▶先人たちの思想や歴史を学んだことを土台として、現代社会における諸課題を倫理的な観点からとらえ直し、生徒自らがよりよい社会のあり方について考察し、その実現に向けて行動することを促すように配慮して記述した。

172 第3章 現代の諸課題と倫理
1 生命科学と倫理 173

### 科学は生命にどこまでかかわるか

**課題学習 1 生命科学と倫理**

**バイオの時代と生命倫理**

生命科学や**バイオテクノロジー**（生命工学）が、20世紀後半から飛躍的な発達を続けており、21世紀はバイオ（生命）の時代になるだろうと予想されている。

1970年代に遺伝子組み換え技術が確立され、科学技術が本格的に生命に介入するようになった。1980年代からは、さまざまな先端医療技術の実用化により、人間の生と死のあり方に関しても人間的な選択の幅が拡大されることになった。

こうして、胎児診断にもとづく出生選択の是非、脳死と臓器移植の問題、人工延命技術の発達にもともなう尊厳死の問題など、これまでになかった多くの倫理問題が発生し、それらに取り組むために「生命倫理[学]（バイオエシックス）」という新しい分野が成立した。

その特徴は、生命をめぐる新たな難問に、倫理、法律、社会などさまざまな角度から総合的に取り組もうという点にある。巨大化した生命科学技術をコントロールし、ときには利用を制限するための倫理的基準を設けることは、人間に課された最も大きな責任のひとつになっている。

**患者の権利 インフォームド・コンセント**

バイオエシックスは、1970年ごろにアメリカで誕生した。その背景には、医療技術などの発達とともに、1960年代の公民権運動、消費者運動などで高まった人権意識が医療分野にもおよんだことがあった。一般市民の医療改革運動によって、患者の権利が確立されていったのである。

その柱は、**インフォームド・コンセント**（十分な説明と理解にもとづく同意）と患者の**自己決定権**の重視である。それまでのアメリカの医療は、医師による**パターナリズム**（父親のように善悪を干渉すること）と**権威主義**の傾向が強かったとされる。そうした傾向に対し、患者を医療サービスの消費者とみなし、患者が必要な情報を知る権利とその情報にもとづいて自己決定する権利を尊重することで、医師と患者の関係は、上下関係から対等の関係へと転換することがめざされたのである。

**母は誰か 生殖革命がゆるがす親子観**

1978年に世界初の試験管ベビー（体外受精児）が誕生して以来、**生殖革命**とよばれるほど、さまざまな生殖技術が開発され、医療として臨床応用されてきた。

新しい生殖医療が普及するにつれて、出産の可能性が拡大され、不妊の悩みをもつ人々の、子どもがほしいという願いはかなえられやすくなった。その一方で、たとえば精子・卵子・受精卵の凍結保存技術は、生殖を時間と空間の制約から解放した。凍結受精卵を用いれば、両親が亡くなった後、その遺伝的な子どもが生まれることさえ可能である。

このように、新しい生殖技術の多くは、人間の精子・卵子・受精卵などの生殖物質を身体から切り離して用いることができるため、それらを自由に組み合わせたり、実験材料や商品とすることも可能となる。

また、子の生物学的な母は産んだ女性であるという、不変と思われた事実が崩れる事態も生じるようになった。これまでの親子観や家族観を大きく変えてしまうことも懸念されている。

**課題 調べてみよう**

不妊の日本人夫妻が、夫の精子を日本の病院で採取後、凍結して海外に空輸し、有料で卵の提供を受けた女性の精子で受精させ、別の代理母の子宮に移植して出産に成功した例がある。

この場合、生まれた子どもには、卵子を提供した遺伝上の母、出産した代理母、養育する社会的母という3人の母が存在する。

この事例では、どのような問題が心配されるだろうか。

**脳死と臓器移植の問題点**

**脳死状態**は、人工呼吸器が医療現場に普及する1950年代ごろに出現した。当初は「不可逆昏睡」などとよばれたが、臓器移植の普及に伴い「脳死」とよび替えられ、人の死とみなされる臓器移植の対象になっていく。

日本では1997年に、脳死状態からの臓器提供を可能とする**臓器移植法**が成立した。しかし、脳死を一律に人の死とすることは反対論も根強く、この時は、臓器提供と脳死判定に関し本人が同意し家族が拒まない場合に限り、脳死を死と認めた。

▲ pp.172~173 「科学は生命にどこまでかかわるか」

## ◎ テーマページ【Close up】一覧

- 1 臨床心理の知見から学ぶ (14 ページ)
- 2 対話による哲学 (20 ページ)
- 3 ヨーロッパにおけるキリスト教教会と社会 (45 ページ)
- 4 無常観と日本の文化 (85 ページ)
- 5 精神と身体と「私」 (128 ページ)
- 6 現代の心理学 (167 ページ)
- 7 現代アメリカの政治哲学 (168 ページ)
- 8 生命への畏敬 (169 ページ)
- 9 人工知能の進化は何をもたらすか (170 ページ)

▶ p.167 現代の心理学 (【close up 6】)

### 現代の心理学

**科学としての心理学**

行動主義心理学の祖、アメリカの**ワトソン**は、臨床上の経験と観察に依拠する精神分析学や、自分自身の精神状態を観察する内観法に依拠していた20世紀初期の心理学に異を唱えた。心理学が科学であるためには、客観的に観察可能な「行動」を対象とすべきと主張したのである。

ワトソンは、人間の行動とは刺激に対する反応であると定義し、たとえば、学習者どのような刺激を与えれば、学習という反応がより円滑に進むのかを探ろうとした。

**脳科学と認知心理学**

反応を示すわけではない。現実には、思考という過程を経ることによって、同じ刺激に対しても多種多様な行動を選び取っていくのである。

心理学の対象は、再度、行動に直接あらわれない心の中での過程にもとり、人間の思考を刺激に対する反応を調節する過程としてとらえる**認知心理学**が有力となりつつある。

その制御過程は、おもに**脳を媒介**として行われる。認知心理学は、知覚、記憶、思考といった従来の心理学の概念を、神経細胞からなる人間の脳というハードウェアがどのように情報を処理しているかという観点から探求しようとしていく。

この間、コンピュータや情報科学、神経科学や脳科学などが大きく発展してきた。その成果との間わりの中で**認知科学**とよばれることもある。



**脳の認知と注意論** 左図のは、若い女性と認知した場合の注視点。右図のは、年配の女性と認知した場合の注視点。目や口は視線を集中させることで、相手の顔を認知していることがわかる。(「グラフィック心理学」より)

**心理学の学際化**

他方、感情・発達・社会性などの意味世界は、脳のたたらからだけでは直接に説明することが困難である。人間の「こころ」とは、「こころ」の外側の、他者や「もの」の世界との間わりの中でしか理解されないものだからである。

この観点からは、物理学をモデルとする自然科学としての心理学にこだわるよりはむしろ、哲学・言語学・社会学などと交流をもつことが望まれている。

また、認知心理学者の中には、矛盾を解するデカルトの心身二元論とは違った理論的枠組みをもつ**スピノザの心身一元論**に注目し、心と身体の間わりあいを探求しようという動きもあらわれている。この立場では、「合理的・理性的」な意志決定以前の身体症状ともなった情動や感情のはたらきに注目していくことになる。

▶2 によって現代の心理学では、実験・観察・調査などデータを得られ、そのデータを分析するための統計学的手法が重視されている。

▶3 ワトソンのこの考えは、「バグロフの犬」で有名な条件反射の大きな影響を受けたものであった。ロシアの生理学者バグロフは、犬にニヤと与える





第3章 現代社会への進路 167

- 2 -

## 2 対照表

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当 時数
プロローグ 人間とは何か		4～6ページ	0.5
<b>第1編 現代に生きる自己の課題</b>	(1) 現代に生きる自己の課題		3
1 人生の中の青年期		8～10ページ	
2 自分を見つめる		11～13ページ	
3 社会を生きる		16～19ページ	
<b>第2編 人間の生き方と社会のあり方</b>	(2) 人間としての在り方生き方		59
<b>第1章 哲学と宗教の源流</b>	ア 人間としての自覚		(18)
<b>第1節 古代ギリシアの思想</b>	 <p>▲ p.33 ヘレニズムの芸術 (ミロのヴィーナス, ルーブル美術館蔵)</p>		5
1 万物の始源の探究		22～23ページ	
2 ソクラテス		24～26ページ	
3 プラトン		27～29ページ	
4 アリストテレス		30～33ページ	
5 ヘレニズムの思想		33～34ページ	
<b>第2節 唯一神の宗教</b>			4
1 イスラエル民族と一神教		35～37ページ	
2 イエスの思想とキリスト教		37～41ページ	
3 キリスト教の発展		41～44ページ	
4 イスラームの始まり		46～48ページ	
<b>第3節 古代インド思想と仏教</b>			4
1 古代インド思想の形成		49～51ページ	
2 仏陀と仏教		52～55ページ	
3 仏陀以後と大乘の発展		56～57ページ	
<b>第4節 中国思想</b>		5	
1 中国思想の源流	58～59ページ		
2 儒教の始まり 孔子の思想	60～62ページ		
3 儒教の再構築 孟子・荀子・法家思想	63～65ページ		
4 儒学の展開 朱子学・陽明学	66～67ページ		
5 老荘思想	68～69ページ		
<b>第2章 日本の思想の歩み</b>	イ 国際社会に生きる日本人としての自覚		(18)
<b>第1節 日本の自然と日本神話</b>			2
1 日本の自然と風土		70～71ページ	
2 日本の神話と古代日本人の宗教観		72～74ページ	
3 神道の成立とその展開		75ページ	
<b>第2節 仏教の受容と展開</b>			4



図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当 時数
<ul style="list-style-type: none"> <li>1 仏教の伝来と国家</li> <li>2 平安時代の仏教</li> <li>3 鎌倉時代の仏教</li> <li><b>第3節 近世の道徳</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 儒教の受容と武士の道徳</li> <li>2 朱子学への批判と儒学の新展開</li> <li>3 国学</li> <li>4 武士の道徳から庶民の道徳へ</li> </ul> </li> <li><b>第4節 幕末から近代国家への移行</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 西洋文化の受容と対応</li> <li>2 啓蒙思想と民権思想</li> </ul> </li> <li><b>第5節 近代日本の模索</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 近代の受容</li> <li>2 キリスト教と日本人</li> <li>3 民族主義の台頭</li> <li>4 近代日本の社会問題</li> <li>5 日本の哲学</li> <li>6 民衆からみた日本人のあり方</li> </ul> </li> <li><b>第6節 戦争の時代とその後の日本</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 戦争への道</li> <li>2 戦後の日本思想</li> </ul> </li> </ul>	<div style="text-align: center;">  <p>▲ p.76 東大寺の大仏</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>▲ p.98 ペリー艦隊（「武州潮田遠景の図」）</p> </div>	<p>76～77ページ 78～79ページ 80～84ページ</p> <p>87～89ページ 90～91ページ 92ページ 93～95ページ</p> <p>96～98ページ 99～100ページ</p> <p>101～103ページ 104～105ページ 105～106ページ 107～108ページ 109～110ページ 110～111ページ</p> <p>112～113ページ 113ページ</p>	<p>4</p> <p>2</p> <p>5</p> <p>1</p>
<b>第3章 現代社会への道程</b>	(3) 現代と倫理		(23)
<ul style="list-style-type: none"> <li><b>第1節 人間の尊厳</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 ルネサンス 人間の発見</li> <li>2 宗教改革 近代における信仰のあり方</li> <li>3 モラリスト 有限性の自覚と寛容の精神</li> </ul> </li> <li><b>第2節 近代科学と人間</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 近代科学の成立</li> <li>2 近代科学の方法</li> </ul> </li> <li><b>第3節 民主社会と幸福</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 人権思想の形成</li> <li>2 社会の発展と幸福の追求</li> </ul> </li> <li><b>第4節 自己実現と社会参加</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 カントの思想</li> <li>2 ヘーゲルの思想</li> <li>3 社会主義の思想</li> <li>4 実存主義の思想</li> </ul> </li> </ul>	<p>ア 現代に生きる人間の倫理</p> <div style="text-align: center;">   </div> <p>▲ p.132 『百科全書』の扉絵</p>	<p>114～117ページ 118～119ページ 120～121ページ</p> <p>122～123ページ 124～127ページ</p> <p>129～133ページ 134～136ページ</p> <p>137～139ページ 140～142ページ 143～144ページ 145～150ページ</p>	<p>3</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>7</p>

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当 時数
5 実証主義とプラグマティズム <b>第5節 新しい時代への扉</b> 1 他者との間に生み出される世界 2 無意識と欲望 3 人間主体を取り巻く構造と権力 4 理性の立て直しと公共性の追求 5 フェミニズム 6 民主主義と公正の両立	 <p>▲ p.153 アウシュヴィッツ収容所</p>	151～152ページ  153～155ページ 155～156ページ 157～159ページ 160～162ページ 162～163ページ 164～166ページ	6
<b>第3編 現代の諸課題と倫理</b>	<b>イ 現代の諸課題と倫理</b>		<b>7</b>
1 生命科学と倫理 2 地球環境と倫理 3 情報社会における倫理 4 経済活動と倫理 5 家族・地域社会と倫理 6 文化・宗教の多様性と国際理解 7 国際平和と人類の福祉	 <p>▲ p.178 月から見た地球の出</p>	172～177ページ 178～183ページ 184～187ページ 188～191ページ 192～195ページ 196～199ページ 200～203ページ	
<b>エピローグ</b>		204ページ	0.5
		<b>計</b>	<b>70</b>